

## 喫煙に関する意識調査

村上 和雄・成田 素子

Consciousness investigation about smoking

Kazuo MURAKAMI and Motoko NARITA

### 1. はじめに

2002年3月1日の英紙タイムズ紙に、全世界で年間8千億本のたばこを販売、20億ポンド(約3,800億円)もの利益を上げている世界第2位の英ブリティッシュ・アメリカン・タバコ(BAT)のマーチ・ブロートン会長はインタビューに答えて「たばこは健康によくない、私は控えている」、さらに「子どもにたばこを控えるよう忠告した」と述べた。娘と息子は父親の忠告を聞き入れ、たばこを止め、会長自身も夕食後の時々の喫煙を除きそれ以外は控えていると答えている<sup>1)</sup>。膨大な利益を上げているタバコ会社のトップですらたばこの有害性を認識し、若者たちの喫煙には問題があることを認めている発言である。

米国では、多くの煙草訴訟により信じられない補償金をタバコ会社は支払っている。これらの訴訟によりタバコ会社の内部文書が明らかになっている。その内容は子どもたちを目標とする宣伝活動であった。その例を挙げてみよう。

**RJRタバコ:**「数々の研究により、14歳～20歳層は簡単に喫煙を始める秘密の消費市場であり、この年代にたばこを売り込めば簡単に大儲けできる。」

**フィリップス・モリス:**「今日の子どもたちは将来も喫煙を続ける常連客です。事実、喫煙者の大部分が最初にたばこを吸い始めるのは10代です。フィリップモリスとして、10代の喫煙者は特に重要です。」

**ブラウン&ウィリアムソンタバコ:**「15歳から25歳の年齢に重点的にたばこを売り込むべきです。彼らが見るTV番組や雑誌などのたばこ広告を掲載する効果を調査しましょう」他にも外国タバコ会社の同様な内部文書が多数明らかになっている。

日本でも独占的に生産・販売しているJTもこんな標語をつくっている。「ハタチまで待って楽しい煙の輪」、これは20歳を過ぎたらたくさんたばこを吸いましょうと言うことになる。

喫煙の有害性は昔から言われているが、喫煙者にとっては、わかっているがそれほど重要なことではないと思う傾向があった。また、多くの非喫煙者は、喫煙者が上司、年上、男性であったので、たばこの煙を我慢していた、そして現在もしていると言える。最近の喫煙者数は全世界では減少しているが、一方若者、女性の喫煙者は増加傾向にある。JTの全国喫煙率調査に

よると、20歳代女性の喫煙率は1975年が12.7%、2000年が21.9%（1999年23.6%が最高）と約2倍になっている。さらに、はっきりとしたデータとしては明らかにされていないが、20歳以下の喫煙者もかなりの数であることが市販されているたばこの本数と大人たちが吸うたばこの本数に大きな差があり、その本数は一年間に数千万本といわれている。そのぶん青少年少女たちが吸っていると予測されている。

最近の社会環境は、国内では、千代田区で見られるように「路上禁煙」条例が施行され、日本各地の市町村で同じ条例の実施が、考慮されている。さらに、この秋からは、東京周辺の私鉄電車のホームから完全に喫煙コーナーがなくなったり、職場では限られたスペースでのみでしか喫煙できない分煙が進んでいる。このように喫煙者にとっては肩身の狭い状況であり、さらに、たばこの値上げという経済的な面からの攻めと八方ふさがりであるが、それでもたばこを止められない人がたくさんいるのも事実である。

このような状況にある「喫煙」に対して児童・生徒・成人がどのような意識を持っているかを、アンケート調査をしたが、その一部の結果を報告する。アンケートの総回答数は1,487名中1,392名、93.6%とかなり高い回答率であった。

## 2. 煙草の有害性について

本論に入る前に、煙草の有害性について、特に化学物質による毒性という観点からまとめてみた。たばこの煙は大きく主流煙（喫煙者が吸ったり吐き出したりする煙）と副流煙（たばこの火のついていいる部分から発生する煙）さらに環境たばこ煙（副流煙と喫煙者の呼気煙の混合煙）に分けられる。どの煙も粒子相（エアロゾル）と気相からなる。表1、2には紙たばこの

表1 紙たばこ主流煙、副流煙中の有害物質（発ガン性物質）含有量

物質名	主流煙（MS） ng / 本	副流煙（SS） ng / 本
ベンゾ（a）ピレン	20 - 40	68 - 136
ジメチルニトロソアミン	5.7 - 4.3	680 - 823
ジエチルニトロソアミン	1.3 - 3.8	8.2 - 73
N - ニトロソノルニコチン 4 - （N - メチル - N - ニ トロソアミノ） - 1 - （3 - ピリジル） - 1 - ブタン	100 - 550	500 - 2750
ニトロソピロリジン	5.1 - 22	204 - 387
キノリン	1700	18000
メチルキノリン類	700	8000
ヒドラジン	32	96
2 - ナフチルアミン	1.7	67
4 - アミノビフェニル	4.6	140
オートルイジン	160	3000

表2 その他のたばこ主流煙、副流煙中の有害物質

物質名	主流煙 (MS) ng / 本	副流煙 (SS) ng / 本
タール (総称)	10.2	34.5
ニコチン	0.46	1.27
アンモニア	0.16	7.4
一酸化炭素	31.4	148
二酸化炭素	63.5	79.5
窒素酸化物	0.014	0.051
フェノール類	0.228	0.603

煙の中に含まれる有害物質の含有量を主流煙と副流煙に分けて示した。たばこの煙の成分は二千種類あると言われているが代表的なものを示した。有害物質は主流煙より副流煙に多く含まれている。主流煙の粒子のうち、フィルターを通過後、大きさ $0.52\mu\text{m}$ の粒子が最も多く、肺の中に入って滞留時間2～2.5秒の呼気煙は少し大きくなって $0.57\mu\text{m}$ の粒子が最も多い。一方、副流煙は $0.43\mu\text{m}$ と主流煙の粒子より小さい。副流煙は火のついている部分より3～4mm手前の約 $350^{\circ}\text{C}$ の部分から放出される<sup>4)</sup>。たばこの大部分(55～75%)が副流煙となる。主流煙はpH5前後の酸性、副流煙はpH9前後のアルカリ性である。副流煙が目にしみたり、鼻が痛くなるのはアルカリ性であるためである。

表1に示されている発ガン性有害物質のうち、ジメチルニトロソアミン、ジエチルニトロソアミン、ニトロソピロリジンなどは気相中に、ベンゾ[a]ピレン、N-ニトロソノルニコチン、2-ナフチルアミンは粒子相に含まれている。

また、米国環境保護局(EPA)は2001年冬に正式にダイオキシン類を発ガン物質と見なしたが、発ガン性より免疫毒性や生殖毒性があることで外因性内分泌攪乱化学物質(環境ホルモン)として知られており、たばこ中にダイオキシン類が含まれていた場合問題である。特に、若者や妊娠した女性が喫煙し体内に入った場合、生殖機能への影響が現れる心配がある。たばこ中に含まれるダイオキシンを測定した例は少ない。福岡県衛生公害センターで測定された結果では、WHOの規定する耐容一日摂取量(TDI) 1～4pg以下の0.2pg(20本単位で)程度で問題ないとの報告がある<sup>5)</sup>。しかし、民間の研究所が5種類のたばこについて測定したところ、福岡県のデータより低い値を示したものもあったが(0.14pg/20本単位)、銘柄によっては0.3～0.96pg/20本単位で20本以上喫煙する場合は、食品からの体内侵入を考慮するとWHOのTDIを越えてしまう<sup>6)</sup>。もちろんダイオキシンの影響の健康への影響は十分明らかにされておらず、また個人的にその影響に差がある。

### 3. アンケート調査結果と考察

アンケート回答者は次の通りである。

成人回答者総数752人 {男性314人 女性438人、社会人336人 学生416人}、小中高生回答者数

640名（小学生463名（男子229名、女子234名）、中学生66名（男子32名、女子34名）、高校生111名（男子58名、女子53名））である。回答者の年齢層は10代未満133名、10代507名、20代227名、30代46名、40代40名、50代41名、60代6名、70代2名で、10代20代の回答者が全回答者1,392名のうち52.77%を占めている。

（1）成人アンケート回答者の喫煙率

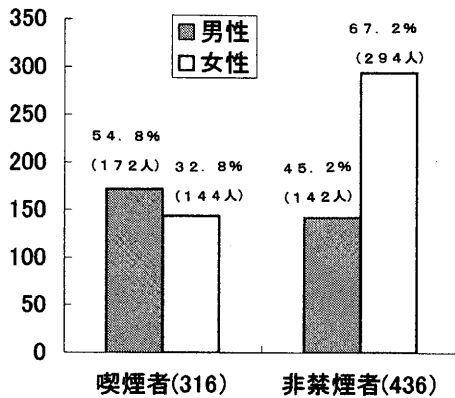


図1 男女別喫煙率

図1は成人回答者の男女別喫煙者、非喫煙者を示したグラフである。

全体の喫煙率は42.0%、男性の喫煙率は54.8%、女性の喫煙率は32.8%であった。平成12年のJT全国喫煙者率調査結果と比べると、男性JT53.5%、現調査54.8%、女性JT21.9%、現調査32.9%であった。男性の喫煙率はほぼ近い値であったが、女性は高い喫煙率を示した。JTの喫煙者率の調査でも、20代30代の女性の喫煙率が上昇しており、現調査の回答者が20代30代が多いのでこの結果になったと理解できる。

（2）成人回答者の未成年時に、家族に喫煙者はいたかについて

図2、3は成人回答者の未成年時に、家族に喫煙者がいたかどうかの結果を示した。この結果は非常に興味深い。喫煙者の62.0%の家庭に喫煙者がいたのに対し、非喫煙者の場合、40.5%で約20%の差があった。喫煙者はおそらく両親や祖父母であろうが、家族が喫煙していると抵抗なく煙草を吸う傾向があることを示している。両親のうち、母親が喫煙した方が喫煙者になりやすいという報告もある。また、喫煙母の子どものぜんそく有症率は家族に喫煙者がいない子どもに比べ1.3倍も高いという環境省の調査結果もある。

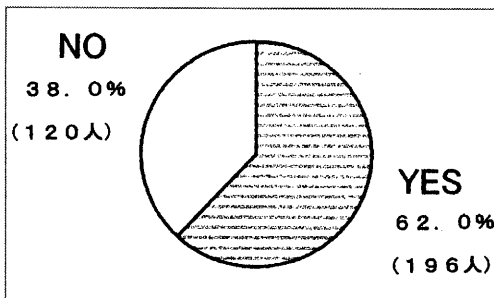


図2 あなたが未成年の時、家族に喫煙者はいましたか（喫煙者対象）

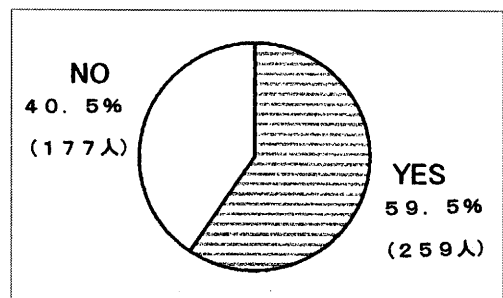


図3 あなたが未成年の時、家族に喫煙者はいましたか（非喫煙者対象）

# 喫煙に関する意識調査

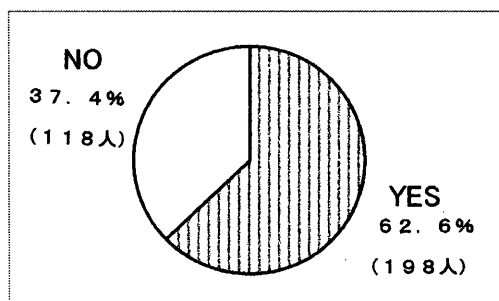


図4 たばこは周囲の人の健康に害があると思いますか（喫煙者対象）

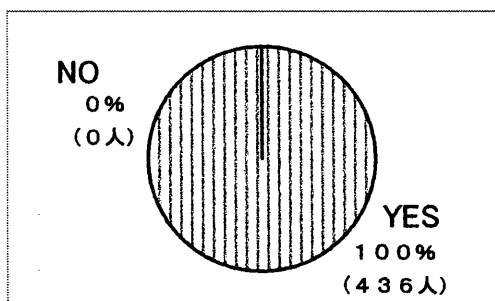


図5 たばこは周囲の人の健康に害があると思いますか（非喫煙者対象）

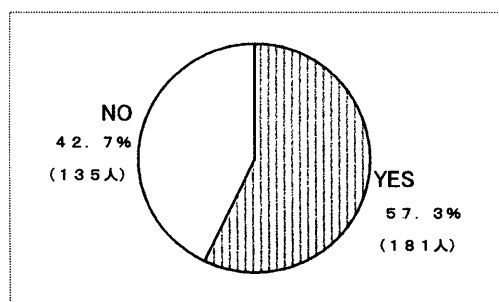


図6 あなたが喫煙している時、非喫煙者から嫌な顔をされたことがありますか（喫煙者対象）

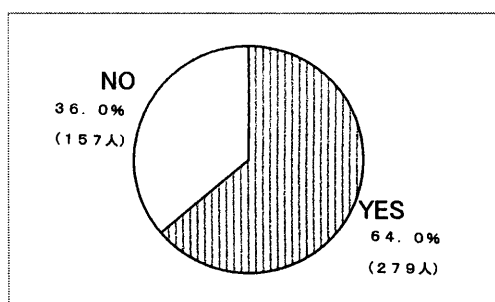


図7 あなたは喫煙者が喫煙している時、喫煙者に嫌な顔をされたことがありますか（非喫煙者対象）

## （3）たばこの健康被害の意識について

図4、5は成人喫煙者の周囲への健康被害意識についての回答である。喫煙者の62.0%の人が周囲に健康被害を与えていることは意識している。非喫煙者は100%と有害であると思っている。喫煙者でもかなりの人が迷惑であると感じている。喫煙者でも人のたばこの煙は吸いたくなくとよく聞かれる。やはり喫煙者は非喫煙者の立場を考えて喫煙すべきであろう。さらに、図6、7は喫煙者に、喫煙時にたばこを吸わない人に嫌な顔をされたことがあるか、また、非喫煙者はたばこを吸っている人に嫌な顔をされたことがあるかとの質問に対する回答である。喫煙者の6割は嫌な顔をされたことがあり、非喫煙者は約6割強の人が嫌な顔をされたことがあり、ほぼ同じ割合であるのが面白い。

## （4）自分の子どもの喫煙について

成人対象の質問であるが、将来自分の子どもが喫煙することにたいしてどう思うかの結果が図8である。この回答も喫煙者、非喫煙者で大きく分かれている。これは（2）の質問の見方を変えたものである。喫煙者は約20%が良いと考えているのに対し非喫煙者はゼロである。喫煙者でも悪いと考えている人が22%おり、非喫煙者は52%である。このアンケートの回答者のうち64.5%が20代であることから、たばこの強い影響を受けたことがないため若干喫煙者の喫

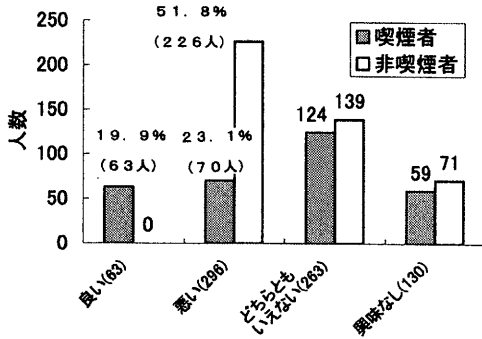


図8 将来、自分の子どもが喫煙することをどう思いますか (成人対象)

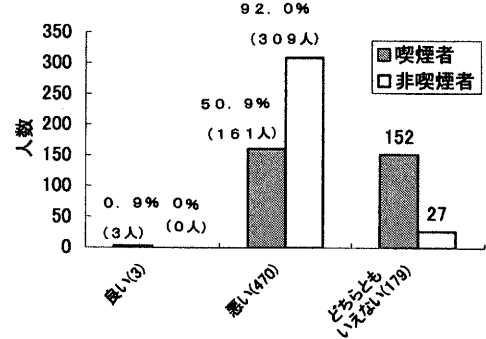


図9 未成年者の喫煙をどう思いますか

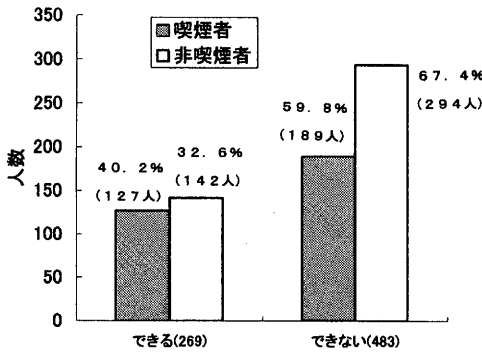


図10 学生服を着た未成年者が喫煙していたら、あなたは注意しますか (未成年対象)

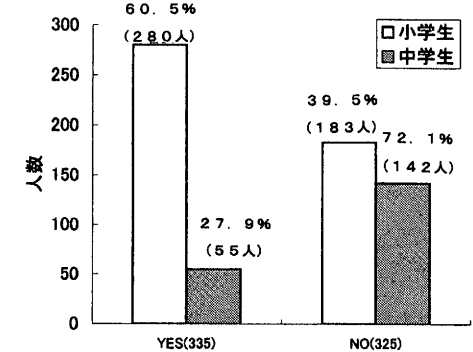


図11 あなたは大きくなったらたばこを吸いたいですか (未成年対象)

煙することは悪いの回答数が少なく、また、既婚者・配偶者ありが40.8%と少ないので子どものことまで考えが及ばないのではないかとも思える。

#### (5) 未成年者の喫煙について

成人対象に、未成年者の喫煙についてどう思うかの質問に対する回答が図9である。喫煙者・非喫煙者ともほぼ100%が良いとは思っていない。しかし、50%の喫煙者は悪いとも思っていない。この数値が喫煙者が減らないことを示している。また、学生服を着た未成年者が喫煙していたら注意できるかに対する質問結果が図10である。この質問は、注意したときにトラブルが起きる可能性を考えるとできないと答えてしまうが、回答結果を見ると喫煙者は40.2%の人が注意できるのに対し、非喫煙者は31.6%と少ない。非喫煙者はたばこの煙をずっと我慢してきたので当たり障りがない方がよいと思うのであろうか。

## (6) 将来たばこを吸いますかについて

小中校生に対する質問で、大きくなったらたばこを吸いたと思いますかの質問に対する回答が図11である。アンケート回答数は660である。小学生と中学生に分けて集計されているが、大きな差が見られる。小学生では60.4%がたばこを吸いたいと考え、中学生になると38.7%と大幅に減少している。これは小学生のたばこの害に対する認識不足、親などの喫煙がかっこいいと見えるなど表面的な感覚からきているものと思われる。小中高校生全体で見ると吸いたい吸いたくないが、半々に分かれている。1. はじめで、述べたように、喫煙願望の子たちには、たばこの有害性をしっかりと認識しない限り喫煙率を減らすことは不可能であることは明らかである。

## (7) 喫煙者の家族に対する配慮について

小中校生に対する質問で、まず、あなたの家族にタバコを吸う人がいるかの問いの回答が図12である。小学生では56.8%、中学生が72.0%で、父親か、母親か分らないが、JTの30代の男性喫煙率（58.1%＝平成11年）と比べると小学生の親は平均より少なく、中学生の親は10%程度高い。あなたの家族でたばこを吸う人はたばこを吸うときあなたに断りますかに対する回答が図13である。これは喫煙者が子どもへの影響を考えているかである。喫煙する親たちはたばこの影響あると考えられる小学生には気を配るが、中学生には配慮が少なくなる傾向があるのかもしれない。しかし、非喫煙者の母親であると、部屋での喫煙は禁止、喫煙者の父親は家族になるのが通常であろう。

## (8) 小中校生のたばこを吸う家族への気持ち

たばこを吸う家族に「やめて欲しいな」と思ったことがあるかの結果は、図14である。

小学生が58%、中学生が84%と意識はかなり高い。子どもが家族の喫煙に対し不快感を普

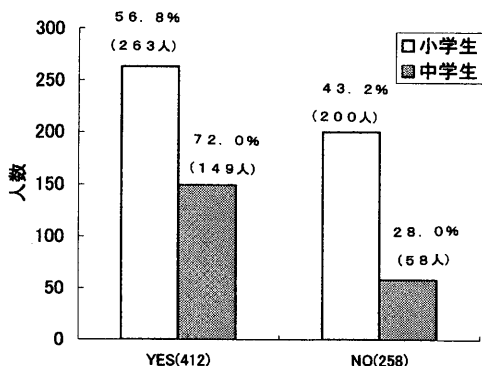


図12 あなたの家族でたばこを吸う人はいますか (未成年対象)

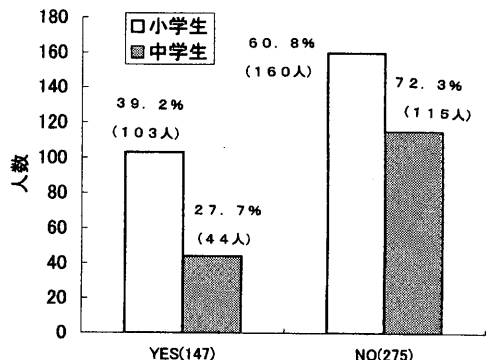


図13 あなたの家族でたばこを吸う人は、吸うときにあなたに断りますか (未成年対象)

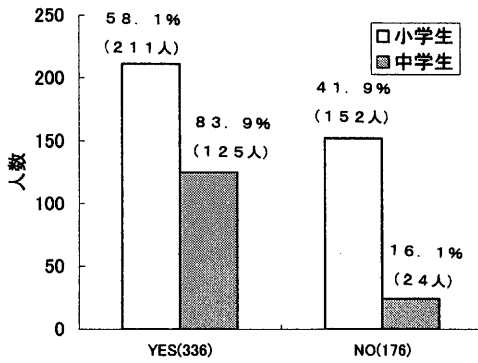


図14 たばこを吸う家族に対して「やめてほしい」と思ったことはありますか (未成年対象)

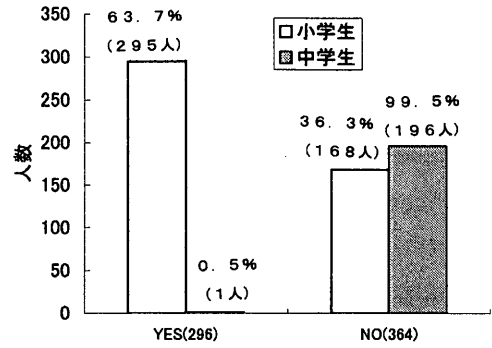


図15 たばこは体に良いものだと思いますか (未成年対象)

段、感じていることが推測できる。(6)の小学生の回答、将来吸いますの60.8%の回答とは矛盾している。見た目にはかっこよく、吸ってみたいと思うが、現実には家族に吸っている人がいて不快感を感じると止めて欲しいと思うのであろう。

#### (9) たばこは体によいかについて

小中校生に対する質問で、「たばこは体によいもの」と思いますかに対する回答が図15である。中高生の99.5%が有害であることを認識しているのに対し、小学生は64%が体によいと考えているのは問題である。たばこの有害性を十分理解できていないことにつきと思われる。やはり小学生には、たばこを吸っている家族の人から迷惑を受けることがあり嫌だなと思うが、害はそれほどなく将来は吸ってみたいという意識が読み取れる。中高生になると学校でたばこの有害性をたくさん聞く機会があり認識が高く、ほとんどすべての子が良くないと考えていることが分かる。

以上が小中校生・成人の喫煙に対する意識調査の結果で興味深いことが多い。

さらに一歩踏み込んだ喫煙に関する児童・生徒の実態調査(神奈川県厚木保健福祉事務所平成14年3月の報告書<sup>7)</sup>)では、中学1年生で0.7%が、高校3年生では21.66%が毎日、喫煙をしているのが現実である。高校3年生がたばこを初めて知った時期は中学1年生の時が8%、2年生が23%、3年生が19%と中学2・3年生で急増している。小学4年生の時に経験しているものもある。タバコを吸うきっかけは、何となく(54%)、友達がすっているから(20.6%)、大人の気分を味わいたいから(12.2%)、家族がすっているから(10.3%)アイドルが吸っているから(4.0%)の順である。我々の調査と類似した両親の喫煙有無と、生徒喫煙経験率調査では両親が喫煙している子どもほど経験率が高く、母親が喫煙している子どもが男子、女子とも経験率が最も高く、母親の影響が極めて高いことが分かる。

20歳30歳代の女性の喫煙率が平成5年頃から、上昇し、最近は20数%代を推移している。若



い女性が喫煙するということは、一つの見方としては男性と対等であるという意識が高くなってきたと考えられるが、一方、交際している男性が喫煙していてそれにつられて喫煙をはじめた女性が多く見られ、カップルでタバコの煙を競っている光景がよく見られる。

#### 4. おわりに

たばこは十代二十代の若者にとって、大人への一つのステップなのかも知れない。しかし、長い人生にとって喫煙がどのような悪い作用を持っているか知らせるのは大人の義務であろう。その大きな責任を担っているのは両親である。たばこの有害を知らせ、若者自身が判断できるまで導かねばならないであろう。本稿が若者・成人が喫煙に対しどんな意識を持つかの理解の一助となれば幸いである。

最後に、本研究のアンケート調査を行った環境情報学科卒業研究生 築野由佳君に感謝します。

#### 引用・参考文献

- 1) <http://user.shikoku.ne.jp/kaohashi/childsmoke.html> (2003/10/15),
- 2) <http://www.adr.jp/user/Current/akito/Somke.htm> (2002/10/23),
- 3) <http://www2.health.ne.jp/library/5000/w5000247.html> (2003/10/09)
- 4) 梅津剛吉、北島麻利子、生活・環境化学物質と安全性、南山堂129-143 (1999)
- 5) 松枝隆彦他 第32回大気汚染学会講演要旨集475, 1991  
松枝隆彦他 環境化学vol. 2, No.4 (1992)
- 6) 環境化学総合研究所, 買ってはいけない、週間金曜日part2, p162 (2002)
- 7) 神奈川県厚木福祉事務所報告「喫煙に関する児童・生徒の実態調査」(2002)